

江戸名所図會

二十

和書門			
八	一	六	三
二	一	六	三
冊	架	函	號

庫文閣内		和書	
八	八	七	〇
冊	冊	架	架

内閣文庫	
番號	和 8870
冊數	20 ( 20 )
函號	174 36



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



文社  
庫村



顔觀音堂 新宿の渡口より半道とて西北の方中川の堤

傍く飯塚村とてあり本寺聖觀世音ハ金像あり

内合龍と秘して拜せり

別々慈覺大師の刻の觀音の木像を以て合龍前

安を相傳ふ此地ハ昔莊官関口氏某う采地あり

墳墓の旧址なりと往古関口氏此地に就く熊野権現及ひ水神

等の社を創せり其社前ハ老松と榎樹の二樹の雙立あり

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増せ人以此奇ありと

又此樹間時とて光を發し或ハ龍燈の梢にかゝると

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀り此

樹下を掘り一二の佛具を得たり

弘治の傍に住む翁媪素より信心や目蓮の是必古時此地に有名の寺院

ありと云ふと云ふ竟は同年六月六日謹く猶此土中と掘りに

金像の大非の像一軀を獲り

深谷氏の家に移し假し佛壇に安を相好端嚴実し凡工の

所造よりあり然し前宵深谷氏老翁媪共夢み

應ありと云ふと云ふ奇ありと云ふ竟は此地を闢く草堂と

營し此靈像を遷し

按はせよと親觀音の像ハ瓶瓶の中より出現し此稱ありと云ふ

依式部の念持佛なりともいひ傳へり此地の縁起に載る異之何の

依侯 新宿より北の方の邑名なり

神鳥抄曰 下總國 葛西

依侯 御厨 百八十丁 新御厨 在之 云云

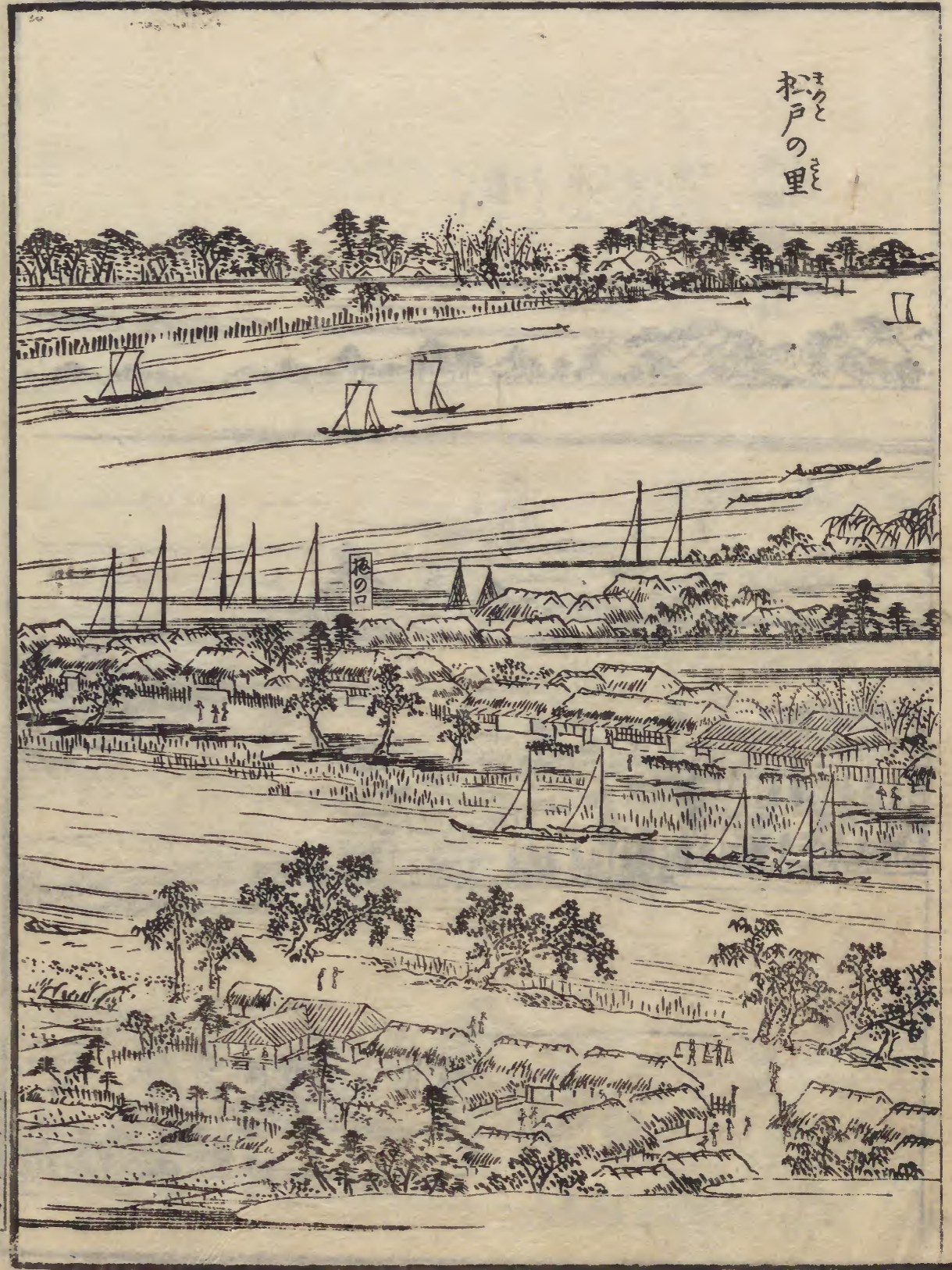
和銅寺廢址同所あり佛生山と号し

和銅年間の草創ありと云傳ふ中古迄も伽藍

天文六年國府臺合戦の時兵火の爲ふ灰燼となり



半田稻荷社  
東葛西領  
金町あり  
来由ハ洋  
多ク拾  
遺不記す  
へ



松の口  
の里

寺僧も悉く追殺され、終に廢寺となり、今に至るまで

の<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>松戸津 常陸街道中<sup>に</sup>驛舎あり、更級日記に鏡の瀬松里此

津よとあり、とあり、此地の<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、人欽美経紀は治承四年九月十二日武蔵と下総の境あり、松戸の庄市河と川の<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、むつと松戸の庄の名あり、あり、あらん欽

按、この一字を略し、未津土との<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、此地名よ、例多し、既に下総國垣生郡と土民中略し、波不と唱ふた、是あり

松戸堤 同所新利根川の堤を<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>鴻臺戦記に天文六年十月

北條氏綱、小弓御所義明を攻、頃五月四日の夜氏綱夜半に

まきれ、浅草川を打越、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>の宿を夜深は通り、松戸の堤

あ<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>軍議あり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>を載り、此の宿の<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>の地、今<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、人按、

唱ふ、又津と戸とハ通音、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>ハ青戸を云、今<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>ハ幡宮の社に、今<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>ハ

相模臺 松戸の驛より東の方、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>を<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>廣南北五百歩あり、

東西四百歩あり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>鴻臺戦記、天文六年十月國府臺合戦の

条下よ、松戸の川を打越、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>陣の内より、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>推津村上堀江鹿島と

始と<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>五十騎と<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>相模臺よ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>打揚敵の人数と見合を<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり

小弓御曹子墓 鴻臺戦記、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>義明滅亡の条下よ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>乳母レンセイといひ

なる女房御曹子の亡屍と<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>人目を忍ひ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>此相模臺よ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>来

其墓所よ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>詣る由記せし、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>今其墓の旧跡と<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、

行徳船場 行徳四丁目の河岸なり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>土人新河岸と唱ふ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>旅舎あり

て、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>賑ハ<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>江戸小細町三丁目の河岸より、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>此地追船路三里八町

あり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>此所を<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>房総常陸等の國への街道なり

辨財天祠 同所四五町下の方、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>湊村あり、昔ハ潮除堤の松林の

下よあり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、此の旧地を舟天山と<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、今ハ田明院よ、移せ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>正徳年間

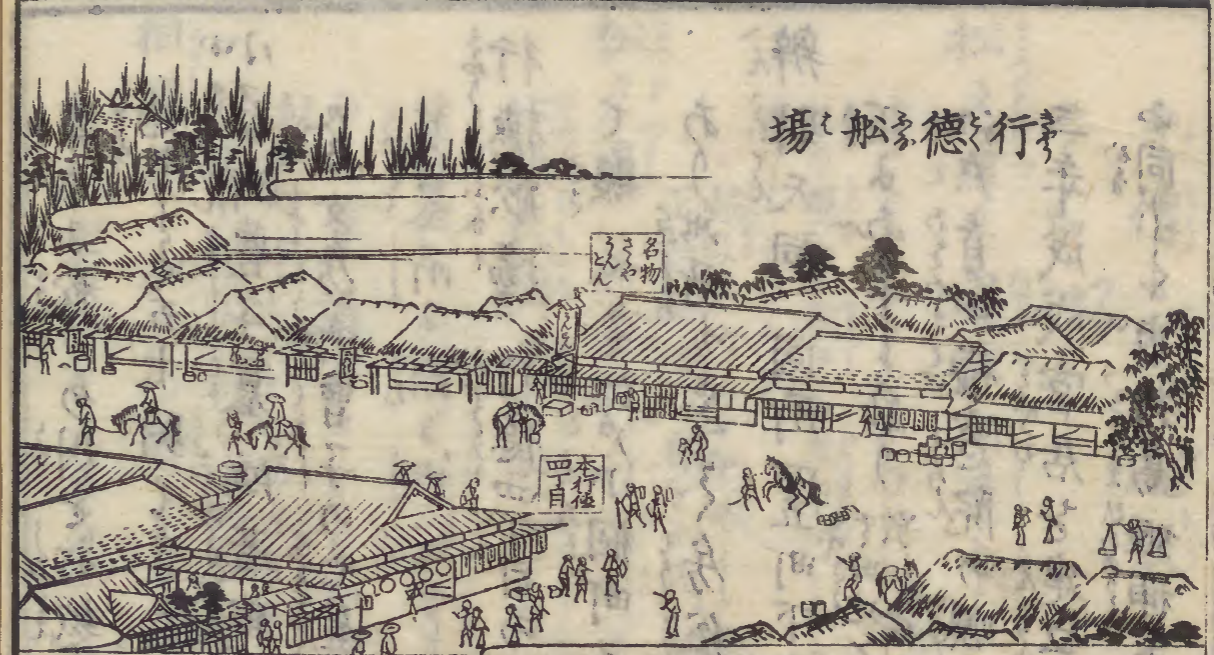
江戸青山梅窓院の順譽唯然和尚、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>此神の靈尔よ、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>あり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>享保

三年戊戌宮居を建立あり、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>との<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>祭る、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>藝州嚴島の海神

小同<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>市杵島姫神、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>海神村の阿諏訪神、<sup>ま</sup>と<sup>つ</sup>男神尚社

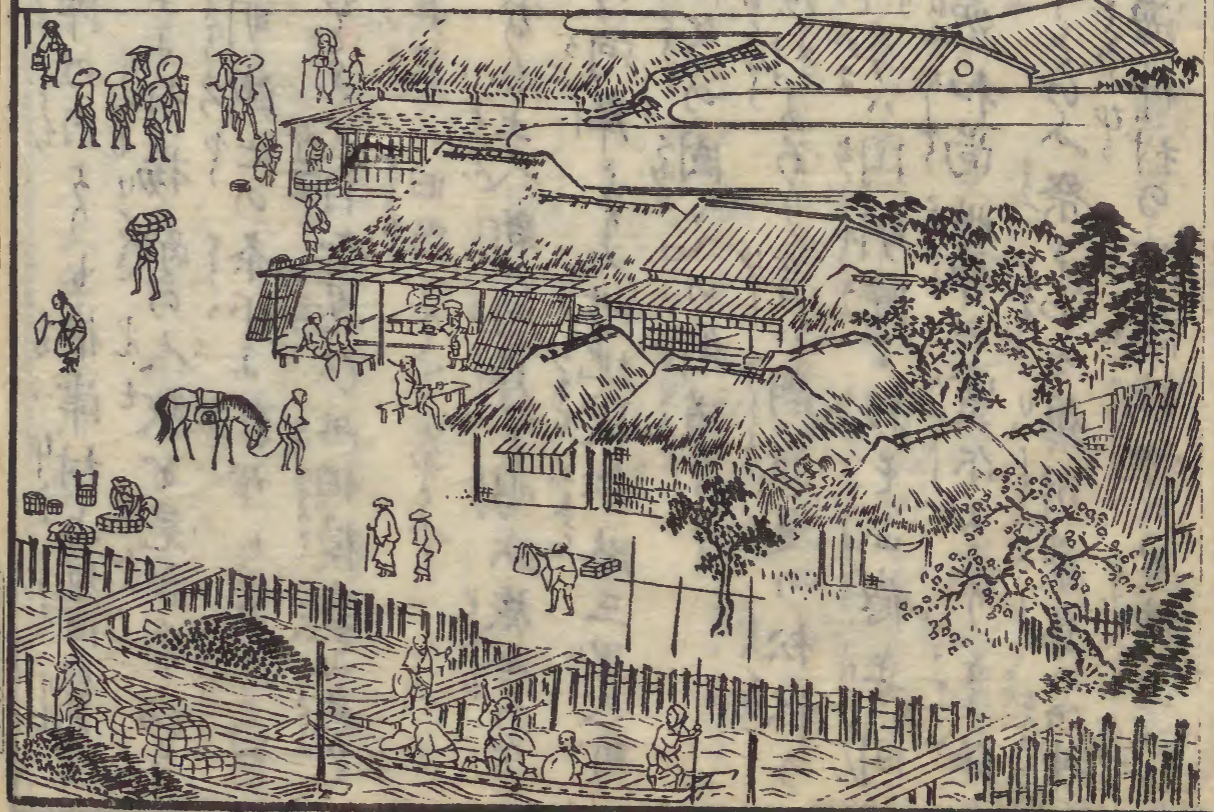


大江戸小綱町三丁目  
 乃徳の巻とく  
 うりけ地まて船橋  
 三里八丁あり房  
 徳の路路下と  
 旅亭ありなま  
 乃人絡繹とて  
 繁昌の地なり  
 成田不動尊へ  
 旅の人の影  
 旅ひ大方



徳行船場

名物  
 本  
 四  
 百  
 種





女神と称を神田あり弁天免と唱ふ

船靈宮 画像一幅探信の事あり古此地大船

古鈴一口湊村青陽山善照寺と号す淨刹は收藏せり芝増上寺は属を開山ハ覺譽上人と号を慈覺大師彫造の觀音湛慶の作の焰王又法然上人鑑御影と称するものあり

斤量五十二錢目餘

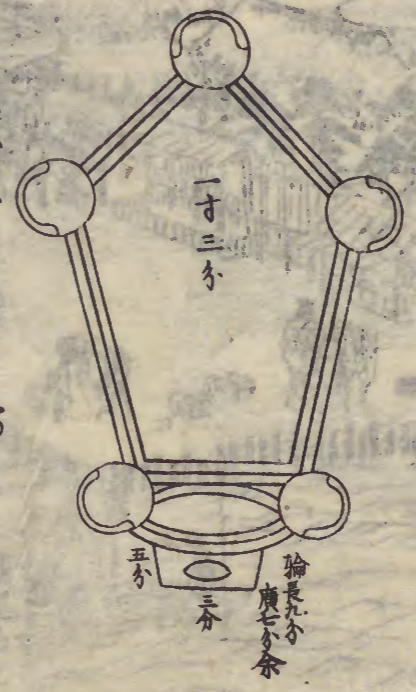
唐銅のやくやく甚古色あり

惣長サ三寸二分劍の裏延板

鈴大サ三寸回り内小石一宛

あり鈴の口一寸八分劍先より

元まで二寸三分



行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側より別當八同所一丁目自性院兼帯此地の鎮守やとて毎歳八月十五日祭祀を行ふ

神明宮 同所一丁目街道の左側よりあり此地の鎮守とて別當ハ

真言宗より自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の

辰より其祭より伊勢内宮の土砂を迂して内外兩皇大神

宮を勧請し相傳ふ當社昔ハ川向中洲と云地よりあり

と後此所へ遷せり又此地を金海の森と号く慶長十九年

甲寅金海法印と号す沙門此地は一字の寺院を創し

金剛院と号し依り金海の森と号す

按し葛西志と号す書は行徳ハ金剛院の岡山某

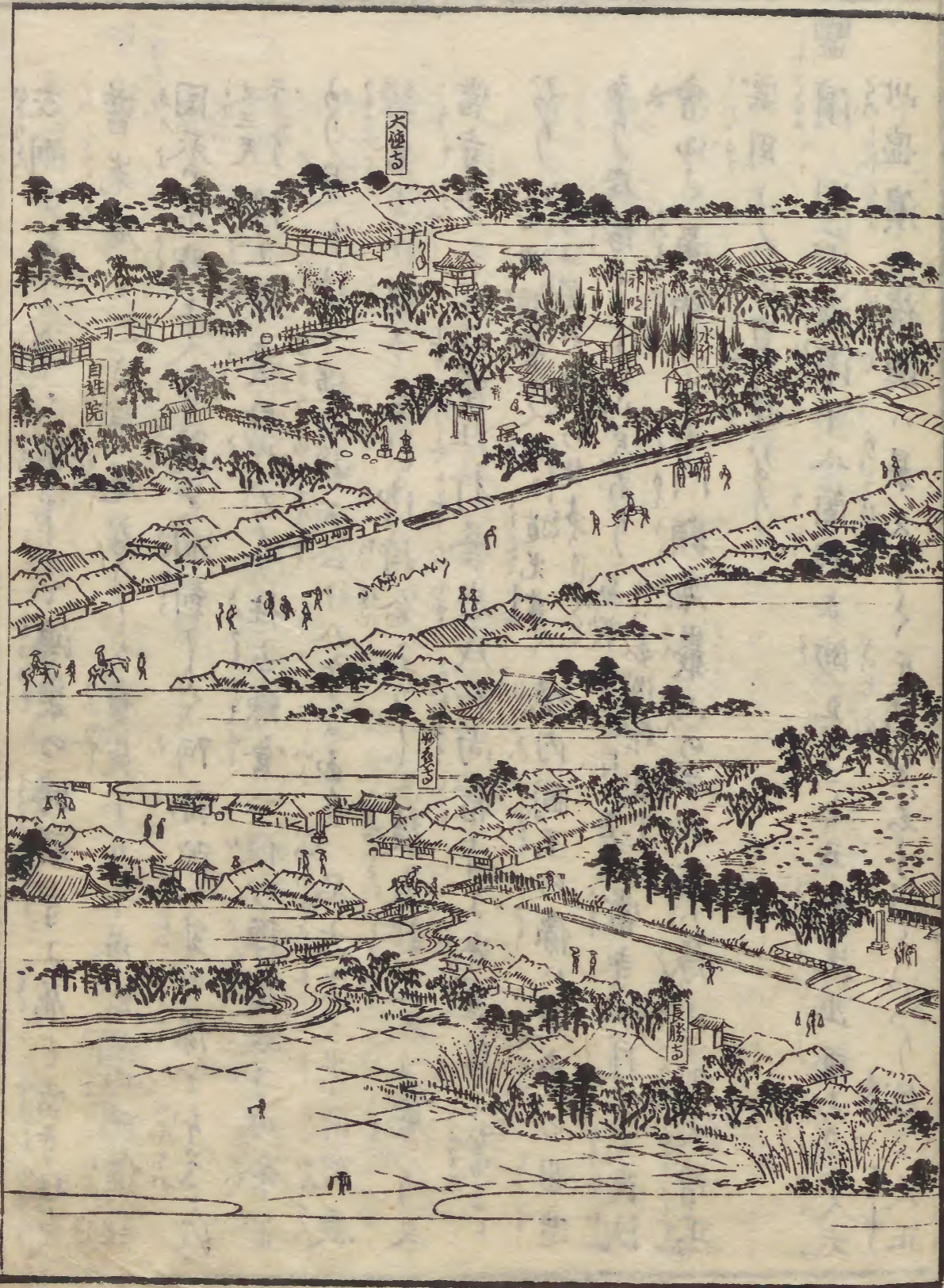
金剛院廢址 當寺より南の方より清杉屋敷と字せり是

則先より此地の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法

漸寺は属せり其昔は徳有驗の山伏住し

竟し此地名とあり云傳ふ

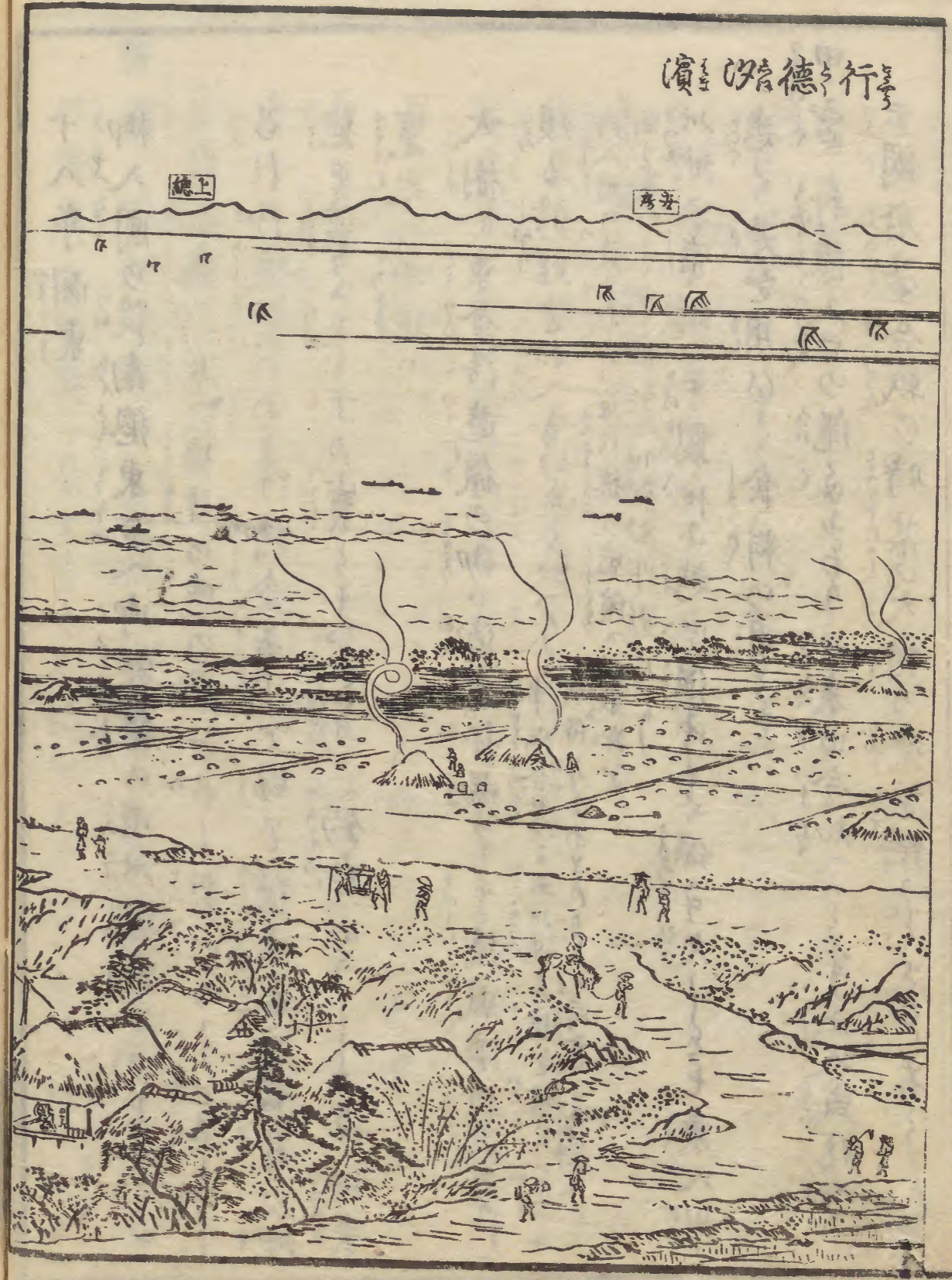
海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の

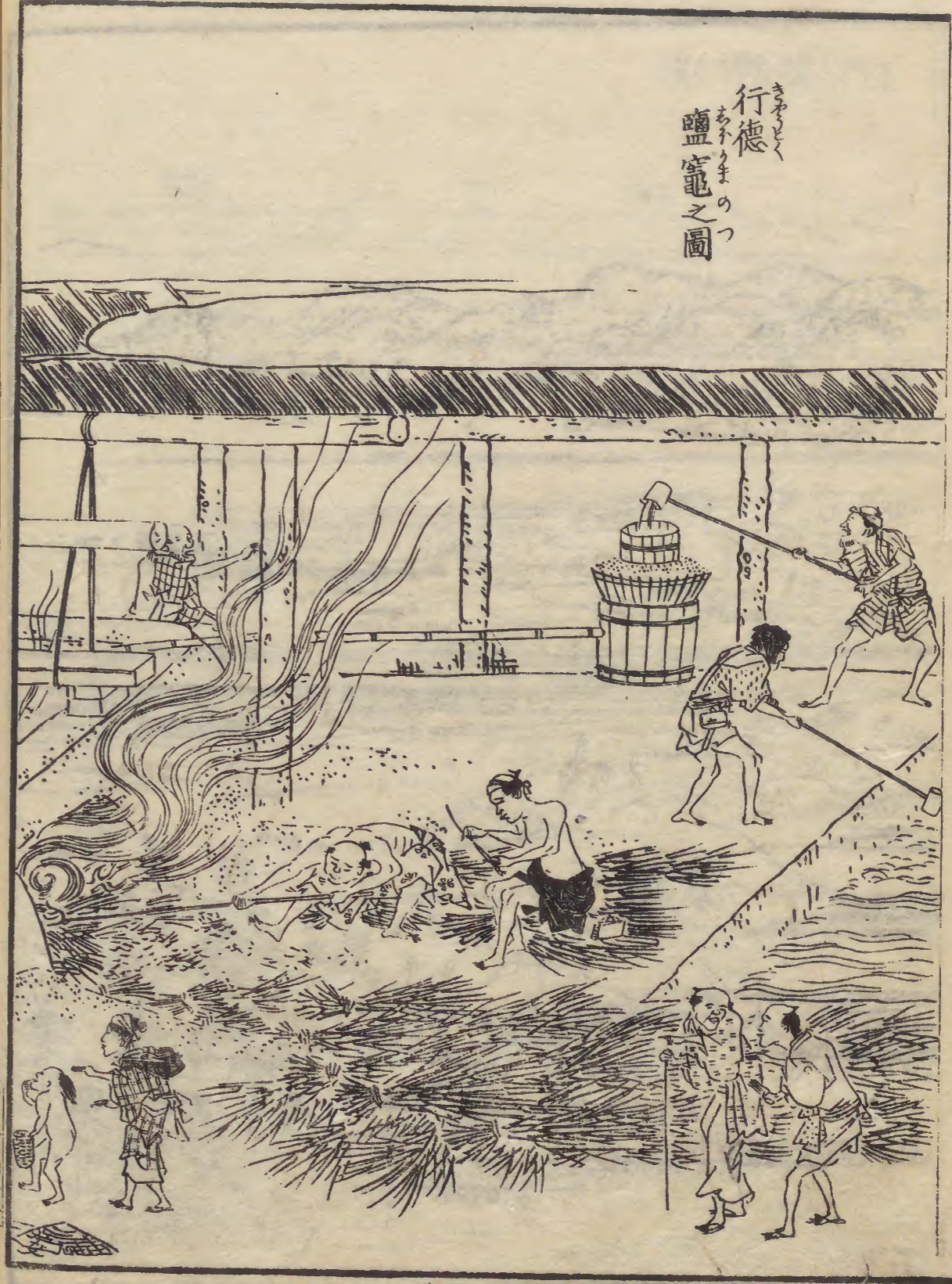
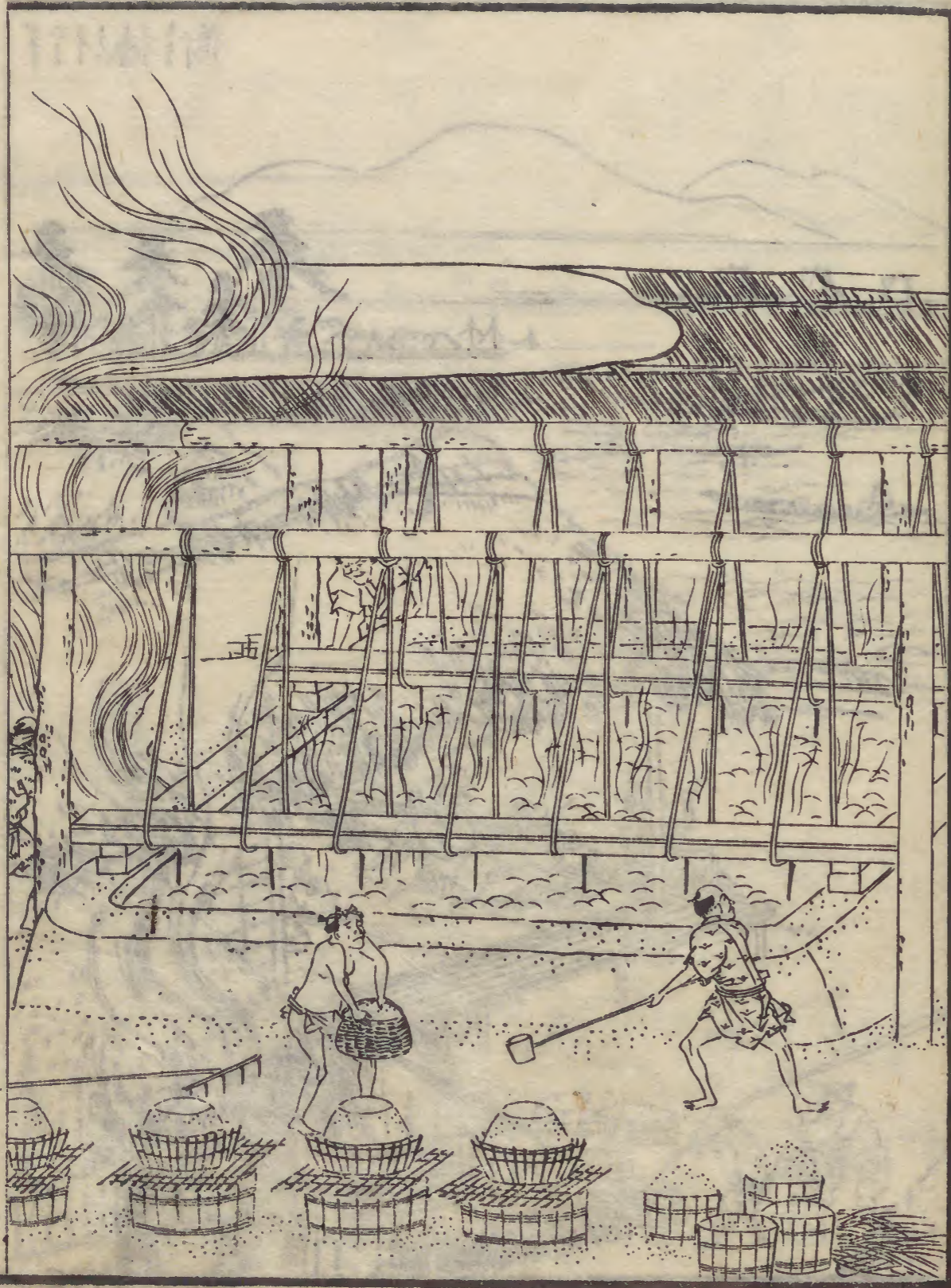


左側よりあり浄土宗中々々鴻巣の勝願寺に属し當寺往古  
 普光庵と云々草庵なり慶長十五年庚戌閑山聰蓮社  
 回誓不残上人寺院を開創し阿弥陀如来の像をかまふ  
 丈三尺佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禅尼政子の命より  
 あり是を造る遙の後天正十八年より一品大夫人崇源院殿  
 鎌倉より移しあり浄持念あり後大超上人より賜り又  
 當寺弟二世正蓮社行誓忠残和尚當寺に安置なり  
 十七世晴誓上人珠道光普く境内閻王の像は運慶の彫造  
 あり座像あり八尺あり毎年正月十六日當寺十月十夜法  
 會あり最賑し山門額海巖山の三大字は縁山前大僧正  
 雲岡上人の真蹟なり  
 鹽濱 同所海濱十八箇村に渉り云風光出趣あり去  
 此鹽濱の権輿ハ最久しと云始と云し然と天正

十八年關東

御入國の後南徳東金へ御遊獵の頃此鹽濱と云々かきせ  
 られ船橋御殿へ鹽焼の賤の男を召し製作のり具より  
 召れ御感悦のあり御金若干と賜り猶未永く鹽竈の煙  
 絶を嘗く天下の寶と云々月 釣命ありり 以来  
 寛永の頃迄ハ  
 大樹 東金御遊獵の砌ハ御金杯賜り後風浪の災ありし  
 頃も修理と加へありり  
 御入國の後日あり此徳の鹽濱への船路と  
 此地の鹽鍋ハ製他不越堅強やと保り久しと東八州  
 悉く是を用ひく食料の用と云  
 甲宮 行徳入口の繩よりあり其由来由今知へり土人或傳へり  
 云國府臺合戦の時某の大將の堯を祀り云とありん也





行徳  
 ちりまのつ  
 鹽竈之圖



行徳衛



當社ハ行徳八幡宮の  
別當兼帶持記す

四光大師鏡御影 行徳の東の海濱高谷村浄土宗了極寺

は安を四光大師鏡を照しく自己の姿をうつし畫をこま

御影なりとしり 土俗錦の御 當寺は 大僧正祐天和尚真承の

塔婆あり 奇特ありし 昔此地は長島殿と稱せし領主

長島湊 葛西長島と一雙の地あり ありし地は住せし

梵音寺の觀音 相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の倭は船と

泊す其後野州奥州常州德州等の國々高瀬舟の便利なき

を用ゆりしありしより行徳へ運送するもとありし

永祿二年小田原北条家の分限帳は太田新六郎所領の中は葛西長島高

新利根川 萬葉集に補小作利根川と云ふ 東鑑等の書に

源平盛衰記に利根川と云ふ 郡の中は大河ありし河の東は葛西の

行徳を流るる小利徳川とも号く水源は上野國利根郡文殊

嶽の出谷より發し高利川吾妻川烏川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至り一河となる

又上州渡瀬川も利根不落合栗橋より合流し一流ハ北総ハ

入開宿本丸等の地ハ傍く東流し鉾子より海へ歸る是を

利根川と号く 一一流ハ武蔵下總の向を南へ流れ國府

臺の下を利徳の方へ曲流し海水へ歸せり 是を新利根

川と稱す 按侍中群要に散位と稱し西宮抄に大節ハ大夫と稱す

と云ふ公事根源云大節は初めは仰ふハ初ハ六位と云ふ

初ハ初ハ五位以上の中は各目なり又朝野群載に檢非違使廳下

初ハ初ハ五位以上の中は各目なり又朝野群載に檢非違使廳下

延喜祝詞式は倭國の六ヶ所能ハ初ハ初ハ五位以上の中は各目なり

里長防令などハ初ハ初ハ五位以上の中は各目なり又朝野群載に

神ハ初ハ初ハ五位以上の中は各目なり又朝野群載に

ありし地は住せし

ありし地は住せし

宣旨申す祭はまのつとをとりかみとまなく物の冠とを称  
 賜ふも辞なきなり野のあかりをきりつと知くし此川を  
 東の川の冠と意せりと云ふ也  
 俗世流河と西國太郎といひ此川を東太郎といふ  
 新文珠の事利根の意と云ふ人云利根川ハ上野國利根郡文珠嶽より發せ  
 利根川は西國利根郡といふ也利根川ハ上野國利根郡文珠嶽より發せ

万葉集 刀禰河泊乃可波世毛思良受多多和多里奈美

神樂註秘抄 篠 本

びさいひはくきとゆりありきふりてりてりてりてり

篠のげは神をそわれめと篠川のるをゆふとすひかり

此篠のげはのわが新勅撰廿九卷のなかの橋仲達とす  
 へられり按ふべきなりとありき未ふと篠川といふは  
 考ふ地ありふいり

夫木抄 川の十はありとすそをわたりてりてりてり

芳雲集 利根川帰帆

利根川ぞとさうふみさうりてり 秀法々

北國江行 利根川の流をさうりてりてりてり 雪惠

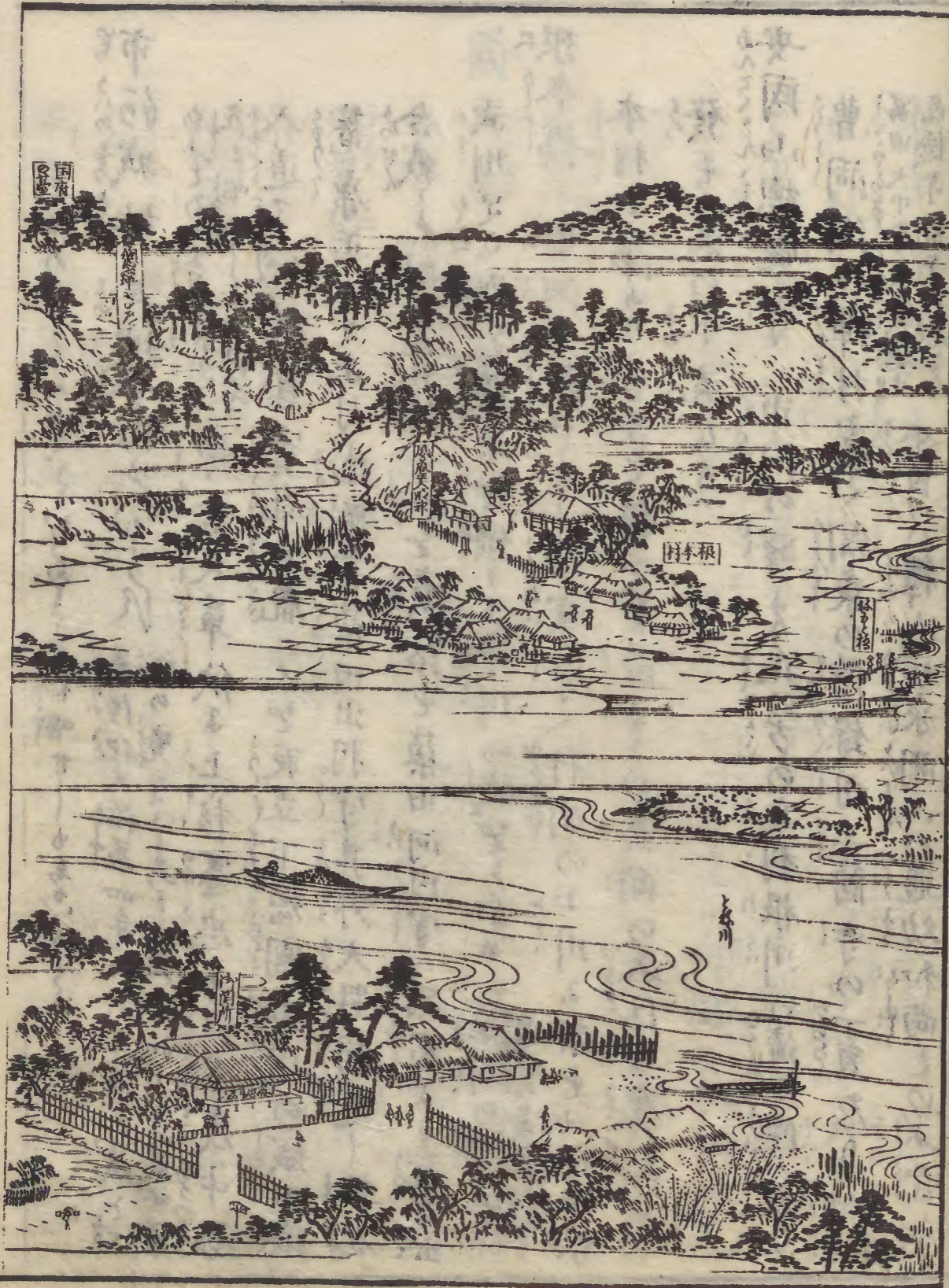
東鑑曰 治兼四年庚子九月二十九日戊寅中略 江

雖被遣御書猶追討可宜之趣有沙汰被遣中四郎 惟重於葛西三郎清重之許可見太井要害之由偽 而令誘引重長可討進之旨所被仰也下略 又 曰 同 年 十 月 二 日 辛 巳 武 衛 相 兼 于 常 胤 廣 常 等 之 舟 撤 濟 太 井 隅 田 西 河 精 兵 及 三 萬 餘 騎 赴 武 藏 國 云 云

迦羅鳴起頼 新利根川の水流なりとす今地さうりてり

土人云く柴保の迦ありと糸五代孫小氏康と野見義弘頼ひの奈下武州江戸より小田系方遠山舟波守富水三郎左門尉を糸くの川を前よ  
 撥ふさうりてり日陰ふかしの洲とありて此川のりありんを撥くは後世の





野依ありてつてつてつてつと根野せしもあるへくす

市河城址 其地今あへり

義経記云治承四年九月十日武藏と下総の境なるもの庄市河といふ所

あそあり青ハ松戸と 鎌倉大草紙上杉憲忠より 今度中務

入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城小指

竈康正二年正月南圖書築田出羽守其外大勢指遣一教度

合戦して同十九日終小城を責落を築田河内守ハ関宿より打出す

武州足立郡を過半押領し市川の城をとる云猶前の第六卷石

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川架を此地を根

本村とのあり号とを橋下を流るハ真間の入江の舊跡より

發せし水の流れなり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流る傍てあり

曹洞派の禪林あり関東の僧録司三箇寺の一負たり 常陸

福田大寺武藏越生 本尊ハ釋迦如来開山ハ通幼和尚といふ當寺

往古ハ近江國あり天正三年乙亥北條氏政當國関宿に

地小移をされと屢洪水の患あり寛文中竟ハ此地小引

とあり惣門の内右ハ鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なり

とハ大田道灌手植樹と稱するハ大門の通り列樹の中下馬の

石碑ハ相對して右の傍あり又客殿の脇ハ梅の老樹あり是ハ

道灌親裁す當寺より涼師道正

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡と云々かく稱す

あへり北条五代記云古き文ハ國府臺小符代嶋岱といふ 按ハ鴻臺ハ武

州栗橋の西ふあり此地を云ふハ 和名類聚抄下総乃國

府ハ葛飾郡ふありと記せり依考あふ國府の近き辺ハあふ

丘山あれハ國府臺とハ号たりあへり

或人云下総國葛飾の府ハ 往古葛西の地と本府と

世ハのありハ葛西昔ハ下総小属せり 永正六年の宗長記行東上座中下総國葛西

の府のありハ 按ハ前新利根川の条下 清輔興義抄の文 以東を葛東と呼ハ以西を

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定めく

以東を葛東と呼ハ以西を



國府基  
總寧寺

其二  
古戰場



國

葛西と八幡一あり一それと今八利根川を際りと一葛西の辺こらく武蔵國へ  
 加へたまふゆと八幡あり一あり  
 府臺古戰場 總寧寺の境内をく其舊跡なり文明十一年

七月北總の一揆臼井の城小指籠りる頃太田持資兵を發して  
 此地小陣城を取立件の一揆を攻落し程の究竟乃要害  
 なりこれ天文六年中 或は小弓 又作御所足利左兵衛佐義明  
 兵を起し小田原を攻んとし一ゆゑ事なるとも洩て其聞あり

これハ同年十月四日北条氏綱及び氏康小田原を進發一同五日  
 鴻の臺の陣を責る戦ひ利あり義明父子并舎弟基頼共討  
 死也又永祿七年ハ大田新六郎 齋兄弟の輩小田原小宿き同苗  
 美濃守資正入道三樂弁及ひ里見安房守義弘等と此地小屯  
 一これハ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむかひ  
 故ハ太田兄弟相國相違して武州岩附へ落行り然ハ北条  
 氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大ハ戦ハ依る





總寧寺眺  
 荒城千仞沒 蕭寺上方閑  
 山斷江帆出 踟迴郊樹來  
 磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺  
 落日斯時恨 臨風起客哀

南邦



國府臺  
 斷岸之圖



義弘三樂の輩終ふ敗走也

以上諸書に載る

殿守臺旧址 同一境内にあり上の富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座

同所あり寺僧傳云古墳二双の中北ふもものを里見越前守忠弘の息男同姓長九郎弘次と云ふ人の墓ありとの一ツハ其主詳か

或云里見義弘の舎弟正木内膳の石櫃なりと中古土崩れたりと云ふ今石櫃の形地上にあり其項櫃中より甲冑太刀の類ありひ金銀の鈴陣太鼓其餘土偶人等と得たりと云

鐘

淵 同所断岸の下利根川の水流と号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵に沈没せ故小号とすと 其鐘今此地の水深に存せたり或人云

國府城址

同所徳寧寺より東の方を以て往古國府五郎某の人の

居城なり一う慶長中より没収せしむるあり

按國府五郎千葉介常胤の弟國府五郎胤道と云ふを云ふ一う後裔の地は住し慶長の頃遷居されり一う同姓牛流前宮の系下也

國分山 金光光明寺 同所東の方國分寺村あり今ハ新義の真言宗

おとく京師三宝院に属を本尊薬師如来の像ハ洞山行基大士の

作脇士の十二神將ハ運慶の彫像なり 堂内鬘頭盧尊者ハ 當寺と

聖武天皇の御願中々毎國に置る所の國分寺の一なり中興洞

山と宥天法印と号に本堂の額に金光光明寺の四字を畫せハ智

積院僧正運淑の筆なり

樓門 樓上小古佛釈尊と安置を開創 釋迦堂 本堂の右小あり

天王の像ハ上古の物やそそ奇古なり其餘古佛像多し續日本紀云聖武天皇普く天下とて釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り并大般

小田原北條家制札一通 小田原北條家制札一通

古證文二通 一通とも天正十三年己酉二月三日とあり

古笈一 龍大僧都觀學院慶長六年と彫あり

延喜式主稅式目 下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧



鏡石

真間の弘法寺より  
國分寺へ移るの  
田畔石橋の傍小  
溝の中あり人云  
此石根地中入り  
其際をあらす  
依要石とも号く  
るとあり



當寺往古ハ伽藍魏々ありしと云ふも此の星霜を經く大衰  
廢し今ハ昔の瓦一を存せしむるも當時の礎石と稱せしむるも堂前小  
あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の跡ゆへ古の寺境ハ乾の  
方ありしと云ふ今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てて丘を以て往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣營の地なり

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり

此石根地中入り其際をあらす故一小要石とも号くと云ふ  
土人此石橋ハ國府基より石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂を以て古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり故一小号と云ふ

真間山弘法寺 國分寺の南にあり市河村日蓮大士弘法の地ハ

一と六門家と稱せしむる所の其一員なり日頂上人を以て開祖と云ふ

真間  
弘法寺

我身ハ  
日蓮 孫 栢 乃



入重  
玄門  
倒修  
九事  
の意  
を  
こころ  
くさ  
と  
せし  
む





本國院日頂寺師ハ六老僧の中にて伊豫阿闍梨と稱せ富本常忍の子なり文永四年  
 丁卯時運上人小就く得度也弘安五年壬午上足の第五とある日蓮上人の滅後守塔居  
 と營庵して本國院と号し土人ハ山本坊と稱せ正安元年己亥父常忍寂の後哀とつ  
 く〜八月十一日を去り終つて〜依示寂の年月其終焉の地を〜  
 一〇〇〇寺院をのりつ〜本堂を釋尊の像と安を富本常忍嘗  
 造り當寺小奉安せ日蓮上人時師と稱せ祖師堂ハ其右小並内小宗祖上人の  
 一〇〇〇眼せの賀の表を賜へ

列を大門ハ松の列樹中〜六丁程あり  
 楓樹 秋遊堂の前ふあり今ハ枯株となり其形を存せしむ〜ハワ〜四五丈小  
 遍覽亭 方丈の構のあり額小遍覽亭と題せ黃檗千保和尚の筆跡  
 江戸の大城甲相の群山雲のそ〜霞小横〜又〜ハ房徳の海水遠く開け  
 實ハ枕里の風光を貯へ〜  
 樓門 石燈の上小葺ゆ左右の金剛カサハ工運慶の作なり〜全懸黒色  
 當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なり〜日蓮大士此地小遊化の項  
 寺僧大ハ宗意と論〜竟ハ大士の化導ニ帰依〜宗風を改  
 轉せしと〜  
 或人云西新井邑総持寺小安〜弘法大師の灵像ハ  
 當寺改宗の頃か〜遷〜まわ〜と云日統撰曰了性

真間の弘法寺に住む或曰日常と問答を屈を請ふ逃より日常衆徒を化す茅因之杖心の道場と云く又先徳記を考ふ東河田谷天台宗の中より性云あり杖心宗祖上人と問答せし住侶の名を住心と云くを此の性云あり

當寺 什宝多き中を宗祖上人及ひ諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ教通あり悉く奉ふ不違每歳九月九日より十八日迄法華經千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日たりあり御景供と修行せり近在の道俗群衆を

真間浦 同弘法寺の前の水田の地を以て勝鹿の浦といふ

此所のゆを云ふなり 土人云昔ハ真間の崖下も浪打寄たりしなり故に此地今も其田跡と云く字も残る

此のあり所謂大洲ハ初々洲あり立野ハ芦を刈りて陸地となりしあり芦野といふを萱野と云く水田を問發せしなり

万葉集

可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈 妣等佐和久奈美多都良思母

夫木抄 此の川は真間の浦の畔にありて海に注ぐなり 俊頼

續後撰集

真間濱 地なりありていふなり 道の隆

夫木抄

真間入江 是も同一辺なり是れも今ハ耕田となり又ハ民家林

藪ふ沿革して古よ違へり

万葉集

勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻荊兼手兒名

志所念

續千載

夫木抄 忘れかその入江は是のく朽なる社の志なりともんよ 為教

日 かりそめはまの人の入江は是のく朽なる社の志なりともんよ 為教

真間於須比

仙覚律師の萬葉集抄云於須比ハ山といふなり 於思雨とありふねあり磯辺ありと本居宣長ハ磯辺の考へて手古奈ハ磯辺ありと浪さゆと云く磯辺といふ意ありとあり磯辺といふ考あり

可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未  
乃於須比爾奈美毛登孖呂爾

真間継橋

弘法寺の大門石階の下南の方の小川に架を所乃

あつ川の橋の中あつ小橋をさしてとり  
或人ノ古ハ兩岸あり故に継橋と云ハ中梁を打ちけり故に継橋と云ハ

万葉集

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻  
未乃都藝波志夜麻受可欲波年

新勅撰

風雅集

猶麻や昔のまに終務をいれすそそまろひそく那 意田

同

有る小越り波はあつ川にやう川をうらまゝ間の終務 雅徑

あつ川に架を所乃夕波越るよとれつぎをー 朝村  
按小朝村の和奇ふよとのつきまーとあつ水の瀬ふけうとつ意あつ山城の邊といはる

入重玄門倒修凡事の意を

ろふと後とせし御ふあをそとのまに終務 日蓮

真間手兒名舊蹟

同所継橋より東の方百歩をうらふあり手兒

名々墓の跡なりとのみ後世祠を営むこれを奉り手兒名明神

と号に婦人安産を禱り小兒痘瘡を患ふ類ひ立願して其

奇特を得とてり祭日ハ九月九日あり

靈告ありあつてこの崇めむとてり春墓文集継橋記手兒名のつを載りといふと

清輔與儀抄云 是ハ昔下総國勝鹿真間野の井ハ水汲下女

なりあまゆき麻衣を着てをさし水と汲其容貌妙あま

貴女ハ千倍せり望月のめく花の咲くめくあま立ると見人々

相競ふる夏の虫の火入る如く湊入の舩のめくなりこふ女思ひ

あつ川に一生のそくを存し其身を湊入投中畧

又かつこれゆめてこかともよなり真間乃入江真間此

継橋真間の浦真間井真間の野なとよあるこれ此あり

云々

過勝鹿真間娘子墓時作歌 山部宿禰赤人

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻  
問為家武勝牡鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此  
間登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久  
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名  
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕  
言來勝牡鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衿着  
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷  
不看雖行錦綾之中丹褻有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入  
火之如水門入爾船已具如歸香具禮人乃言時  
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音  
乃驟湊之奧津城爾妹之卧勢流遠代爾有家類  
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒  
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮  
爾余須等布麻末乃氏胡奈乎

真間井

同所北の山際鈴木院との草庵の傍ふあり手兒奈  
汲る井ありと云傳の中古此井より靈龜出現せし故に亀井

梨園

真間より八幡へ  
 仍道の間子  
 あり二月乃  
 花盛ハ雪と  
 欺ハ似たり  
 李太白の詩  
 小梨花白雪  
 香と賦し  
 送あり



ともいふなり  
 此の本院と云ハ北条家の臣中  
 此人の造立故小鈴木と号し又此庵の傍ハ其祖先鈴木近江守  
 石塔ありこれ同修理と云入造立也  
 按小寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と云  
 然時ハ番匠の家なる人牧鶴岡綱綱牌ふかく載れども又別の人や推考へ  
 万葉集  
 勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒  
 名之所思

葛飾八幡宮 真間より一里あり東の方八幡村あり  
 常陸并房総の海道中  
 驛なり鳥居ハ 別當ハ天台宗中々ハ幡山法漸寺と号し本地堂  
 道をもあり  
 阿弥陀如来を安置一ニ王門ハ表の左右ハ金剛密迹乃  
 像裏ハ多聞大黒の二天を置し  
 神前右の脇ハ銀杏の大樹  
 あり神木とす  
 此樹のうつろの中ハ常ハ小蛇あり毎年八月十五日祭礼の時音楽  
 奏は其時教方の小蛇杖上ハ踊れ出つ衆人よくこれと奇なり  
 古鐘一口 寛政年間枯木の根を穿て置し  
 側ハ應永二十一年午三月廿日と彫解あり  
 按小應永ハ鐘の銘ハ永元亨元年より凡九十有余年後の年号あり  
 此ハ應永の頃世を恐れ土中へかき埋めし其年号月日を刻



八幡宮  
八幡  
八幡宮



きりりや

奉右鑄銅鐘  
大日本國東州下總第一鎮守葛師八幡是  
傳聞寛平宇多天皇勅願社壇建久以來右大將軍  
崇敬殊勝天長地久前橫巨海後連遠村京虫性動  
元亨元年辛酉十二月十七日  
願主右衛門尉丸子眞吉  
法印智圓

筒粥神事

毎歳正月十五日の朝別當放生會此日神輿渡せしる

又同日津宮といふあり夕七時頃當社の社人等集り華表の前は播磨の如く長き  
掛の白布を巻くこと建上の方より其白布を捲き合せて足とわたり代とす念願  
あゝ人身程はあり伴の楹の上へ登り四方を眺め社の方を拜し其下此行の  
相州日向菜師ありありとあそび推登とらふ其趣相似たり又其律宮柱の  
下は樂屋をまわりの衆舞踊社より入の獅子舞大鳥の形を舞ひく此樂屋より  
敵太鼓合せく舞ありあり同十四日より十八日迄の間生姜の市あり故に土俗生姜  
祭と唱ふマチハ祭の権語なり

當社八宇多天皇の勅願中々寛平年間石清水正八幡宮を勸  
請せし宮居より遙の後建久小至り鎌倉將軍頼朝卿再び  
傾の社壇を修營ありより封域廣くく社麗りり又星

霜を登る今ハ老樹鬱蒼

とくく上久とく神道とありしを

八幡不知森

同所街道の右は傍々一ツの深林あり方二十歩ある

す往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中石の小祠あり里老

云人謬く此中小入時ハ必神の祟ありとて是を禁む故小垣を繞

らてあや 或云むり平親王將門平貞盛矢まわり秀郷の討られ後  
六人の遊臣と称せし輩其首級を慕ひ此地小至り一頃許の中は  
入て働を終ふ土偶人と顕れりり其後雷雨に破壊せり此地と踏者あるハ  
必たりありとて大木驚怖せりり又或人の此森の四帯にり心幡の地ハ  
地ありふ幡の八幡ありとハ字せしむるありん

證文下総國八幡庄本妙寺法華寺弘法寺三所寺務職云同在曾谷  
郷田島本家云かくの如く記せり證とます一ありあれハ真間のありり曾谷

曾谷妙見尊

曾谷村長谷山安國寺小安置せり當國千葉寺妙

見尊と同本やき其末木を以て彫刻をといふ當寺境内に王

義之宮あり華表の額に晉王公廟とあり烏石葛辰の

傍に石碑を建つ何の謂れなきを知らず

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡あり別當八日蓮宗あり泰福寺と号し祭礼ハ九月

九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳亮時徳の墳墓ありと云り

神體ハ劍を帯せ馬に軍神の像なりとの事

注進の状ハ幡庄内なる高石神村の地を寄附せり又同年二月同船貞上人ハ附せり證文ハ幡庄高石神南方中島内坪前あり

安房須明神社 同所中山の北池田といふあり北の岡あり傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりとの事

今淡島明神と云

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なり

今淡島明神と云

引箭ハ携りて故なりと云

葛飾志云昔かろの浦ハ盛賣と云

此時既ハ七月孟秋會中ハ家内ハ鬼棚と云

然ハある田家の内ありといふ

中ハ彌地といふ

されとあり

この家ハ不帰らんを云

これハ不測の思ひと云

と云

と云

と云

と云

正中山本妙法華經寺 船橋街道の左側あり

日蓮大士最初轉法輪の道場あり一本寺なり

中興八日祐尊師

鎌倉大草紙云十葉介貞胤父の宗胤三井寺にて討死  
後此國落道宮方老新田義貞の法供よりしと云  
法花の學道あり下徳國中山の法花經寺の中興八日あり是より  
堂建立あり五重の塔婆と建らし後貞上各の吉野へ移り西征將軍の宮の  
河下向の時伊弉利九州へ下り大隅守は補任し肥前國を以て領し  
九州は下向し肥前國松玉山と建立し徳州の中山を以て未代迄此所を  
寺と号せしあり

祖師堂 日蓮上人の像を安んず

日蓮師の額 祖師堂 大虚庵光悦筆

祈禱堂 同所後の額 祈禱堂 筆者不知

法華堂 洞左ふあり大七手刻の  
置此祈大田東明の宅地なり 珠明日常上人の教を受自の宅地を轉して佛宇と  
正中本妙寺と号し則此堂ハ其項堂建らしの供より世俗云飛驒匠作  
あり當時宗祖大士最初傳法 額 光明法花經寺 光悦筆 堂内外禪の家帯  
輪法華説法の道場なり

宗祖大士より常忍へ贈らし消息の写しを板に書く掲ぐ其文云く  
涉四責をもち一曰浮提才一の法華堂造らりと靈山淨土よりなりん  
時八申あけさせしうら

進上 易博入道後 十月廿二日 日蓮判

美書ハ宝庫小収む世不後四葉とて送し云はつと云はつ  
鬼子母神堂 洞左ふあり此鬼子母神堂ハ鎌倉の某の堂ありしを移せりといふ  
往古大士常忍建らし

法華堂 在せし頃一善の像と共彫刻ありと 経藏 祖師堂の前  
りり毎月十七日の夜遊在より 道俗奉養す

重淵橋 堂前の流は 常唱堂 常念あり常は 泣銀杏樹 常唱堂の  
真間弘法詩の詞山日頂上人ハ日常上人の子なり久し父の勲氣を継ぐ思願を  
つひ傳へ 五層塔 同日左あり釋迦多宝あり當寺十八世 三十番神社 後の  
於小寺あり當山の護法神として 寶庫 法書院の奥のあり 宗祖大士  
毎歳十月八日火焚祭を修す

支院三十六字 今破廢せしものありく 二王門 額 正中山 日等上人筆

或い光悦の筆なりと 中興岡山日祐上人墓 総門より内左の方小路を入る二丁を  
奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入る三丁を東北の方あり 文應元年  
宗祖大士此境にあそむ頃當木常忍宅地一字を以て法花堂と  
号け大士として居らむ因る百日の前説法あり 宗門最初傳法論の道場城  
蓮山法花經寺の旧跡なり 蓮上人像 小屋形の像あり 百間を以て  
其中は古大士手刻の土を以て堂とす 聖人の像あり 此地に安置あり  
十二世の住侶日蓮上人此地を封し法華一萬部の経塚を築き古より空藏  
安置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうのしとてあり

開山日常上人石塔 同所道を隔て左の方あり石塔の上ハ草堂といふ  
常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

常忍修院と号し因幡國富城の産中より兼久二年庚辰を以て生る 本不取

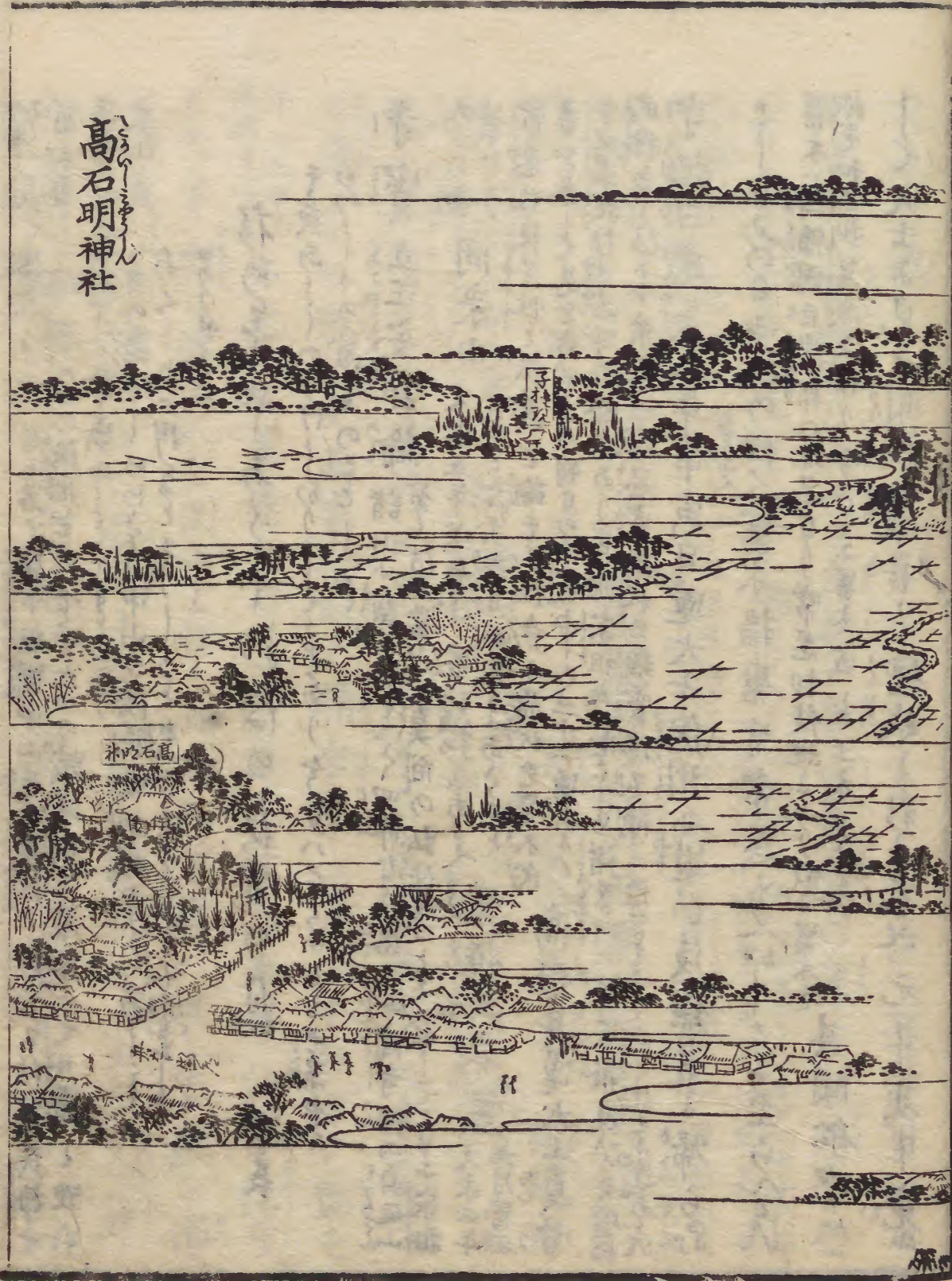
東土産  
杉の  
系  
や  
あじ  
の  
後乃  
教字  
此  
月  
宗長



妙法華經寺



高石明神社



其二





十九日に至るの間法華經千部讀誦七月十五日相撲與初十日  
十三日八日蓮大士の忌辰なるや大法會を設く近國の道俗群衆  
一と大に賑へり

若宮八幡宮 奥の院の地より一丁をり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事 中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より  
兼介貞胤へ贈られし書簡の文云く所々堂宮田  
地等之類中畧若宮御堂中山坊若宮別當職ありは彼岸田谷中下畧云又同什  
物正安三年日高師を深られし書簡若宮持佛堂の本寺と稱す首題の數幅あり  
然れは其頃ハ別當職を別附置く崇敬尤厚なりとあり

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とのふあり 千束  
色よ

あふふ千束  
の池とも引く傳云文應元年庚申日蓮大士 年三十九 富木常忍常忍 假る  
所の法華堂よ入のひ一百日の間妙法輪を轉し群生を教導  
あひし頃此所の池靈婦女と化し日く彼地に至りて大士の説法を  
聽受し信心衆を越え一時彼婦女来り大士よ向て云く妾今  
尊者の法施を冠り一乘の真因を得んと願くハ大士手書の

本尊及ひ自の法号を賜りてんを乞大士乃曼荼羅を授け  
又妙正との法号を授け婦女喜んで去人怪むと跡に隨ひ至  
る此池辺や其婦女の姿を見失ふ然も其本尊忽然として  
傍の櫻樹の枝にかりてあり衆人奇とせり於て此池の靈なる  
子を知り妙正と号け後一社は奉まるとり 其婦女性返の道を曼荼  
羅小路と字し或は蛇

妙正大明神祠 同所あり或は燒神とも稱せり 燒瘡を患ふ者祈  
念して験ありと云 日蓮

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町  
をり入る叢林の中よりあり葛飾の惣社と稱されとも祭神祥な

らも同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社より  
東の方北林間稻荷の小祠の傍より葛の井と稱する井あり當社此  
井手洗とのみ土人相傳へく此井の水脈龍宮界を通すと云瘧



葛飾明神社  
 葛の井  
 萬善寺  
 栗原寶成寺  
 南寺の庭前  
 禰の大樹あり  
 言さ八四をり  
 中々枝乃  
 あり四方へ  
 四間をりあり  
 て壯觀あり









新田部親王

こと

あき

候

あ

あつ



勝間田池  
 栗原本郷の  
 地子あり故よ  
 本郷の溜池と  
 号く

万葉集

かみま

池

われ

あ

あし

洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く

血洗川と云稱せり千葉満胤意富日神社に神傳云右大将頼朝卿征

長大将軍の宣旨を蒙られ後其威勢実草木の靡くことあり

なりと云意富日神社の神官の累代天子勅宣ありて武門

幕下よりおほく度々の催促ありしは是に應せし故頼朝卿

憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ひ清重此地に入

むとせれとも神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より昇居

西栗原より支へて防ぎ戦ひ其乱さす止らざりければ終に神官

治部太補基義神輿の前を腹掻切て空しくありぬ時乃

戦に神輿穢れを以て此川を洗ひ清めりてりて血洗川

とを呼ぶなりとあり或人云海神村の入口浅間より此東の方の山あり

流八原を蛇の端と号は見小川と云わし洗川と稱せし人云源頼義の太刀洗水

なりと按よ此川はついで云ありん又頼義此地に至りては横朝治

阿須波明神祠

西海神村より禪宗大覚院奉祀を娑竭羅

龍王を祀ると云故此地を海神耕田と道路とを隔て海汀に向く

華表を建る九月日を祭祀の受とす此日芋を食を旧例と云

故不土人芋祭と号ありはせり當社より柴をとりてあり旅人として

長途の安全を祈りまゐりてと云傳は奇林良材は下総國阿取波官とありは社ハ

神の誓ひあり小柴を立てておとすありと云と云

爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波

伊波々年加倍理久麻豆爾帳丁若麻續部諸人

新千載名寄 今もいふかへとあやむるはあすの宮ふ少葉さひも 後頼

いづれとあまの孫をかへてんむをばとみ少葉さひも

石芋當社の入口あり里務ふく往古弘法大師東國化度の時日くれ及及び

ありて是を許しつゝ大師那見の輩を教導する方使まそその家の

傍の芋を加持して石とれありと云此亦不其芋四時とも不腐れすて年々

意富日神社初鎮座地

船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地あり日本武尊此海上中々八咫鏡を得ぬ伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの入今意富日神社の地なり此

昔ハ瀧川ニ作リ瀧ハ水の深き處と云訓義ヤク日本武尊と導きあり此所の海

夏見厨海神村の北の方あり今東夏見西夏見と唱へ二三分

古伊勢神の神領あり意富日社の神主是を務たり

と云

神鳳鈔曰 伊勢太神宮造督遷宮事曰 食米處々

注文 二所太神宮御領諸國神戸御厨所蘭神田名田

等合 下總國 夏見御厨 上分布三十段口入三十段一名船

橋二百

神鳳抄其餘下總國あり指馬遠山形葛西猿俣菅田神保等共ニ合ニ

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能



意富日神社  
書也

可奈之伎乎乃爾多氏米也母

かくあめへ古葛飾の早稲をこく神は新嘗なり一をとりてありと此和奇の  
ころろを此かしの早稲をりて神の新嘗なり一をとりてありと此和奇の  
そらめくかしの稲をこく神は新嘗なり一をとりてありと此和奇の  
そらめくかしの稲をこく神は新嘗なり一をとりてありと此和奇の  
そらめくかしの稲をこく神は新嘗なり一をとりてありと此和奇の  
そらめくかしの稲をこく神は新嘗なり一をとりてありと此和奇の

船橋 驛舎なり海神村及び九日市場村五日市場村等の三邑の

徳名わく古の神領の地なり舊名を湊郷と云と相傳姓は

日本武も東征の時此地に至りて海上あり一面の神鏡をゆ

あり其地を海神 依て其地は神鏡を遷しなり然るに頃へ水無

月あゝ早打續官軍大者なる尊其涉禱あり一うハ驗ありく二三

日の間大雨降續官軍勢はゆる竟は凶徒をとりてつ後湊

郷の辺洪水あゝ神鏡の宮所へ行通ふへき便なり一うハ船成

浮ゆく橋とわくあり此地名を奈と云 東鑑曰文治二年丙午三月十一日

東鑑曰文治二年丙午三月十一日 東鑑左典殿の殿息白服を

船橋驛

天道念佛踊之圖



天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の  
薬王寺等の境内に於て執りせり毎歳二月十六日始り同十八日  
終る昔ハ一七日の間執り堂前小土を以壇を築き竹を以柱と儼  
これを梵天と稱し其四方より四の門を開き四十八柄の神幣を建注連  
を引し等皆悉く諸の佛天を表し其内より大日如来の像を安し  
平素と一旨味の飲食を供養せり其詰衆の道俗ハ各一昼夜比  
間六度つ垢離して浄衣を着し白布を以て造り所の宝冠を頂  
き三宝諸尊の法号を稱へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間  
中々弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞せり  
又救世夜叉の相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿  
山を始り踏分ち一頃同國山形の東南天道村といふ地に於て  
これを開闢し其を興基とてこゝに五穀成就の爲の祈りあり  
と云なくハセり

遠く渡

船橋の沖にあり俗釜淵と号く土人の謔云昔平  
将門の愛妾結梗前将門亡びて後ハ流石に都へ歸らむも物  
りく船橋の里小暫しやとて終に此海底に身を沈りしと  
なり此海の漁幸あり其魚の諸魚と淨膳料とて江戸へ運ぶ昔  
大樹此地に至りし頃此の海濱に浦と名つとて又船橋宮  
神宮へも指すあり故に此地の海濱と浦と名つとて又船橋宮  
社説は此海濱の産物なり故に此地の海濱と浦と名つとて又船橋宮  
あり鯛の肥はし海濱の形ありと云船橋宮神宮の法衣海濱に映し自然に魚を産す  
あり実小浦神徳四海に溢れ海濱に感應ありと云わくことありと云  
峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田にあり五山派の禪窟  
あり鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺  
釋迦如来ハ行基大士の作服士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の  
寺院ありし永祿年間里見義弘兵火に罹りて灰燼と爲  
又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄れしと謬り利根  
川へ沈りしと今其處を字し鐘淵と号り國府臺の条  
宝曆中徳巖といふ禪僧  
舟に鐘を造りしと云

意富日神社

意富日古八日を比よ作る天正以來

船橋驛上徳海道

成田海道との岐道五市場村に宮居す世に船橋太神宮

と称せ延喜式内の清神なり関東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖は景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇を  
 して船橋より下向なるとり妙ひ東國八十八村の縣主意富宮の神官を司り  
 たり然るに仁平の頃荒木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基國の時又嗣  
 ありふ依り十葉滿龍の子基龍を養子とす此時日月を以て家の紋と  
 せしう天正十九年辛卯大神君當社に泰指の須神官富氏御役の軍配  
 團扇より根引の若松を添て献りし其後上意より若松は軍配團扇  
 家の紋とす隔年正月年始より八日例に任せ清夜大麻に根引の若松を添て献  
 せしり登城をもとて永規とす

小慶祭神

天照皇太神宮

二座相殿

左八幡太神宮  
右春日大明神

延喜式神名記曰意富比下總國葛飾郡二座

代實錄社曰貞觀五年五月二十六日戊子授下

總國後五位下意富比神正五位下

同書曰同十三年四月三日己卯授同神正五

船橋 意富日神社







又同書曰 同十六年三月十四日癸酉授同神後

神寶 叢雲御劍 長一尺五寸ありあり来由ありと云々

神息劍 長一尺ありあり日蓮大士木劍 疑も同一大士の納らるる

近衛帝宣示 平元年辛未六月十一日船橋六郷の

千葉介満胤神領寄附状 兼久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄

限海西限洗川并呑懸北限石枝路とあり其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

家集 建保六年十一月素還法師于時下後國より入り

常盤御宮 本殿の右神林山の麓にたせあり四方は堀を築かせり

東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

常盤御宮 東照大権現宮の御神影及び大將軍秀忠公御木像日本武

あふみの  
意富日神社  
九月廿日祭祀之圖



あつひ海上の光りあつて後を求めし者どもをさしおひんとす  
九日市場村に存せり同時凶徒彌次を刺し殺す者どもをさしおひんとす  
其後裔海村にありて今ハ知れなき此神一時邑君に祈わらばまじりて  
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今より其神垣と  
等しく崇へると云云依尊其由を帝に奏しおひて伊勢太神宮を  
朝日宮とありて夫と對して當宮を夕日宮と稱しおひて天皇第四の  
皇子五百城入彦尊をく船橋より下向あそしめられ東國八十八  
村の縣主兼當宮の神官たりし其年新嘗の祭を行  
つて後豊受皇太神宮を合祭しなりて二座とし又左右は八幡春  
日の両神を勧請ありて三社とせ其新穀を奉りて地を今も  
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありて奉幣使下向ありて  
東一之宮の號を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて  
天下泰平五穀成就の祈念を命せしむ天喜三年乙未源賴義  
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありて當宮を修造ありて

同年六月六日遷宮なり種々の神室を納らる又仁平元年  
辛未六月十一日勅ありて船橋六郷の地を伊寄附の院宣とあり  
義朝に命せしれ當宮伊再興ありて神室等を収らる  
六郷は下飯山間村 高根村 米田村 金曾木村 夏見村等なり 御造宮の下司ハ千葉介常胤美濃前司清高  
大澤平内兼家等なり荒木田滿國奉幣使より基義神主の  
時賴朝卿より幕下よ加へて肯仰あれとも應せりしハ悉く  
神領を打とれ刺基義腹切て失ぬ 此のハ神の洗川の 条下は伴なり 其後基義の  
舎弟権以基継仙洞へ其由を歎奏上りて其後兼久元年己卯四月  
十六日實朝公へ詔を下し故は千葉滿胤あり昔の如く六郷の  
神領悉く寄附あり然は天文以後東國争戦屢發し頃當宮は  
神領も大方打とれ衰廢せんとせし天正十九年辛卯 台命小  
依船橋郷の中より新小社領を寄しめし慶長十三年戊申  
伊奈備前守忠次を奉行として宮社伊造宮あり又此地は假



磯侶神社  
叅明小大江の  
内洋と望む圖



涉殿を建てしれ時とてこふ入御ありく涉崇敬尤厚く  
 涉武運長久の御祈禱を命せしむ始ハ神官富氏の家を假の涉旅  
建あの中り神官の家を同所田中との地へ移し 貞享の頃  
官當の御祝ハ神官富氏へ賜りしや再ハ元の社地へ移り住り 貞享の頃  
和歌と唱へ 宝曆十一年辛巳勅許ありく古往の例に任せ毎歳  
 鳳瀨に涉後をなすうとハなりぬ  
 當社の祭祀多き中や正月十六日の涉神樂二月卯日の五  
 穀成就の神樂殊に九月廿日ハ大祭や其式甚古雅なり  
 前の日ハ角力具あり此後ハ天正十九年辛卯  
 東照大神君當宮へ所奉宮の時 上覧ありしとあり 其余の形  
 茂侶神社 意富日神社の攝社や同所より六丁計を隔て  
 東の岡にあり祭神ハ木花閑耶姫一座なり故に淺間山乃号  
 わり當社の延喜式内の御神や々々葛飾郡二座の中なり涉手  
 洗池あり今ハ民家の地に入或人云淺侶神社ハ同郡小金領栗ヶ澤村に  
ありく社司ハ交野氏祭神ハ日本武尊ありと云

三代實録曰 元慶三年九月二十五日 壬子 授下  
 總國正五位下 淺侶神正五位上 云云  
 此地ハ海濱に臨たる砂山中に松樹繁茂を西南の方  
 低く前より南総の驛路を見下し後ハ岡續や々々成田の街道  
 東北に繞る富嶽の白雪房然の翠巒荒波の紫霞も共此地の  
 眺望入りく風光最秀美なり例祭ハ六月一日より  
柳當の御祝の根の善松ハ當社の  
地より擇とるを旧例とせしむ  
隔年正月  
年始の時



江戸名所圖會拙光下畢

編輯 松濤軒齋藤長秋



校正 男 藤原縣麻呂



全 縣麻呂男 月岑幸成



畫圖 長谷川法橋雪旦



剞劂 東都

佐脇伊三郎

朝倉伊八

宮田六左衛門

此は東都名所圖會也  
加力家也之り三在采  
徑之り有也之り持也  
其録す所を繼ぐ者志の  
法之り科之り西美事  
有爲母は河か子あ孝

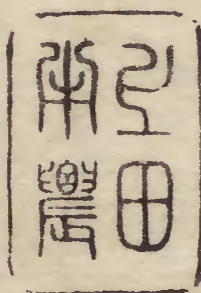
何れも其の類を以て其の  
ち何れも其の類を以て其の  
さるるに其の類を以て其の  
あるに其の類を以て其の  
心来れ其の類を以て其の  
は其の類を以て其の類を以て

自れ其の類を以て其の類を以て  
西に其の類を以て其の類を以て  
然れ其の類を以て其の類を以て  
其の類を以て其の類を以て其の類を以て  
物乃其の類を以て其の類を以て其の類を以て  
其の類を以て其の類を以て其の類を以て

等加<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>此  
等<sup>レ</sup>僅<sup>レ</sup>支<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>遊<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>  
あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>也  
約<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>支<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
了<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>全<sup>レ</sup>く  
生<sup>レ</sup>潔<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>あり

志<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>集<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
の<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>許<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>す  
檢<sup>レ</sup>船<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>局<sup>レ</sup>官<sup>レ</sup>商

上田憲憲



荃齋盛義書





拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齊藤月峯編述

近刻

長谷川雪旦画圖

東都歳事記

全四冊

全

近刻

箱根

熱海

温泉名勝圖會

全三冊

藤原縣麻呂遺稿

長谷川雪旦画圖 近刻

同 雪堤補画

天保七丙申青陽

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

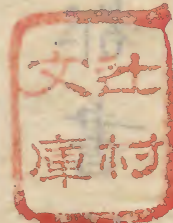


東都書鋪

淺草茅町二丁目

須原屋伊八

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '江戸名所' and '温泉名勝'.



東  
社文庫  
關

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大坂心齋橋筋唐物町

河内屋太助

同心齋橋筋安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸兩國吉川町

山田佐助

同 神田鍛冶町三丁目

北島順四郎

同 淺草新寺町

和泉屋庄次郎

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 日本橋通三丁目

山城屋佐兵衛

同 横山町三丁目

和泉屋金右衛門

同 今川橋本銀町

永樂屋東四郎

同 日本橋通二丁目

小林新兵衛

同 神田通新石町

須原屋源助

同 日本橋通四丁目

須原屋佐助

三都發  
行書林

東  
濠  
嘉  
事  
信

同  
神  
田  
通  
新  
石  
町

